



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.3

2017

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

仏教は6世紀に日本に伝わりました。浄土真宗は親鸞聖人(1173-1263年)によって築されました。英語では“Shin-Buddhism”と呼ばれることがよくあります。このShinは浄土真宗の真で、真実を意味します。仏教は、差別や条件無く、全ての人の為であると説いています。

祈り

小松由佳

浄土真宗のお話を、回数を重ねて頂いていくうちに、たくさんの方が、以前から私が思っていたことと違うということがわかってきました。その一つに「祈り」があります。

「祈り」は、多分、誰にとっても、非常に身近なものだと思います。宗教、信仰の「祈り」だけでなく、人は日常の願いを「祈り」としてることが多いように見受けられます。

健康や身の安全、生活の安泰などを神にお願いしたり、口に出したり心の中で思ったりすることは、人間らしい行為だと思います。私の母国、日本ではよく、「ご健康をお祈り申し上げます」というふうに、手紙の文中や、会話に、相手のことを想っている気持ちを込める表現としても使われています。

私は子供の頃、お祈りをするのは立派なことだ、と思い、よく祈っていました。どんな場所でもいかなる時でも、口に出したり、心に思ったりして祈りました。「世界の平和」や「家族の健康」や「友人の幸せ」や「天災がないように」など、自分以外の人や事象のために祈るのが良い、と思っていました。自分の欲のために祈ってしまった時は、反省したり、神様に赦しを乞うたりしました。しかし、どんなに気を付けていても、自分自身のための願いが圧倒的に多いのです。他のため、と思っても、その中に自分も含まれていたり、神様に気に入られそうな願いを考え出したりするのです。そのため私はしょっちゅう恥じ入り、神様に謝ってばかりいました。



木のもとのお話(3)

お釈迦さま

ところがある日、お釈迦様はご自分の肌につけられているのに気が付かれました。それをご覧になった時お釈迦様は、どんなに修行をしても、自分は聖者ではなく、人間であるのだとご理解なさったのです。

そして修行の山を降り、川で沐浴し、菩提樹のもとで瞑想し、ついに悟りを開かれました。真実とは何か、人間とは何かわかったのです。

6年間の厳しい修行をやめ、菩提樹のもとで瞑想を凝らし、ついに仏陀となりました。

更にそのお詫びの中に、神様のご機嫌伺いをして計算高く謝るふりをするだけで、ちっとも変わらない自分も見えるのです。果てしない自己中心の願いとそれに対する謝罪の堂々巡りで打ちひしがれるような毎日でした。

このように、その頃の私は、自分の叶えて欲しい願いを、神にお願いすることを「祈り」としていました。

また、強い、純粋な「祈り」は奇跡を生む、とよく聞きました。確かに、人間には、自分の願いを強く思うことによって、良い結果を得る力が備わっているように思われることがあるようです。「火事場の馬鹿力」ということもあります。肯定的に強く思うことによって、パワーが湧く、ということは科学的にも証明され、スポーツ選手が活用している、ということを知りました。良い自己暗示のような感じでしょうか。これからもこのような研究が深まり、応用、活用できることに、私は大変期待しています。

しかし、このような力は、常にいつでもどこでもあるものではないでしょう。勝負は勝ちもあれば負けもあります。いくら祈っても願いが叶わないことや、負けることも、命を落とすこともあるのです。また、事故や自然の災害は、無くすのは不可能です。

人間の考えだす願いは、このように確実でも完璧でもありません。しかし、昔の私は、私の願いを祈るのが宗教の「祈り」だ、とっていました。

後に、浄土真宗での「祈り」についてのお話を頂いた時、それまで私が思っていた「祈り」と全く違っていたので、本当に驚きました。

まず、自分の願いを祈るのではないということ。そして「祈り」の対象は「真実」であるということ。ぐらぐら変わったり、揺らいだりしない、しっかりとした「真実」です。はるか昔からずっと存在している「真実」。私たちのために、中心の教えとして、説かれ続けている「宗教」です。決して揺らぐことのない「真実の教え」は、私たちに平等に、変わることなく存在し続けているのです。その「真実」に私たちは「祈り」という形で答えるのです。了解しました、その「真実」を受けております、「南無阿弥陀仏」と祈るのです。

そのお話を頂いた時、私は迷いから覚めたような気がしました。

「教え」は常に私たちのために存在しているけれども、私たちはなかなかそれに気がつきません。私たちは「教え」を無視して、自分のしたいようにし、人を傷つけてでも自分優位になろうとしたがります。神秘的なことに凝ったり、自分たちが生きている間に、決して経験できない前世や死後の世界などについて知っている、と言う人もいます。仏様の教えは、今、生きている私たちのために説かれています。人間としてどうあるべきか、「宗教（むねの教え、中心の教え、真実の教え）」として、常に説かれ続けているのです。その教えを頂いていると気がついた時、人は「祈り」として答えるのです。そして自らの姿に気づき、反省し、謝り、感謝するのです。

今でも、私は常に数え切れないほどの願いを抱えています。集中力や記憶力を高めるために、瞑想のような練習もします。また、友人がお守りをくれると、友人が私のことを思ってくれる心がとても嬉しく、大切にします。しかし、私はそれを「宗教」の「祈り」と結びつけることは、もう、しません。常に私たちのために存在している「真実の教え」に「はい、頂いております、ありがとうございます」と申し上げ、答える。それが浄土真宗の「祈り」だとわかったからです。

